

康寧祥と「党外」の黎明 —台湾オポジション第2次組党運動前夜—

若林 正文

目次

はじめに

第1節 オポジション政治家康寧祥の誕生

第2節 政治的触媒としての康寧祥の「身体」——選挙戦の街頭で「台湾史」を語る「草の根党外」の青年結び——康寧祥の新しい「草の根」性

(要約)

台湾の政党政治史では、1986年の民進党結成前に、選挙や雑誌発行により国民党一党支配に対抗していた「党外」と称される一群の人々が存在していたことはよく知られている。先行研究では、これらの人々とその支持者の間に「一種の政治的団結感」が作られていったことによって「党外」が国民党の外の意の普通名詞から1つの政治団体をしめす固有名詞に転換していったプロセスが1970年代に存在したことが指摘されている。小稿は、「党外」が固有名詞化していく台湾オポジションの黎明期において、その「政治的団結感」の創出に大きく貢献したと考えられる康寧祥の台頭の過程を、近年発表された浩瀚な康寧祥の回想録と筆者などが実施した関連人物インタビューなどに基づきながら検討する。小稿は、台湾的生活文化が色濃く残る台北の萬華で育った土着性、国民党に入党せず郭国基などオポジション政治家の警咳に接しながら形成されたその政治性に加えて、台湾語で台湾史と国際情勢までを語り尽くすことができる新しい「草の根」性を獲得していた康寧祥の「身体」に注目し、その「身体」が1960年代末から1970年代初めにかけての台北の選挙政治の街頭に投入され、「一種の政治的団結感」を醸成する政治的触媒の役割を果たした、と主張する。

はじめに

康寧祥（1938年～）は、台湾の現最大野党民進党の前身、「党外」と称された台湾のオポジションを率いた政治家の1人である。台北は萬華に生まれ育ち、今もそこに住む。民進党の有力な「創党党员」の1人ではあるが、今日、台湾政治と民進党を語る時、この名を思い浮かべる人は少ない。民進党結成後まもなく美麗島事件受刑者が出獄して入党するのと同じに党運営の周辺におしやられた。1990年代の国家統一委員会委員、監察委員などの公職は李登輝（1923年～）総統（在職1988～2000年）の抜擢によるものであった。陳水扁（1950年～）政権期（2000～08年）には、国防部副部長、国会安全会議秘書長などに任命されたが、それでも、民進党支持者でさえも民主化後に成人した有権者には、やはり印象の薄い存在であったろう。

だが、台湾のオポジションの歴史には、「党外」の語が、後に民進党主席ともなった黄信介（1928～99年）の名と康寧祥の名とともに語られ、彼らの名とともに党外（国民党の外、非国民党の意の普通名詞）が「党外」（固有名詞）となっていった時期があった（李筱峰1987、122頁）。換言すれば、「党外」が民進党の前身として形成されるには、国民党との政治的境界がしだいに明確となり、いわば党外が「党外」となっていく時間が必要であった。「党外」の黎明期（1969～

77年)である。

台湾のオポジションの発展過程やその様態については、李筱峰の同時代史的叙述（李筱峰 1987）を先駆として、台湾の学界において近年一定の研究の蓄積がある。たとえば、『自由中国』誌の国民党一党体制批判の言論や 1960 年の中国民主党結成挫折過程の研究（薛化元 1996、蘇瑞鏘 2005、2008 など）、1970 年代初めの『大学雑誌』に依った戦後世代知識人の改革言論の研究（南方朔 1979、韋政通 1989、廖達琪・秦鳳英 1992 など）、「党名の無い党」の結成を目指して挫折した 1979 年末美麗島事件やその後に簇生した「党外雑誌」の研究（蔡盛琦 2008、陳煒翰 2009、彭琳淞 2004、郭紀舟 1995 など）、そして 1980 年代中期の民進党結成過程の研究（陳信傑 2000）などである。だが、かつては「党外」の代名詞のようにその名が語られたことがあるにもかかわらず、康寧祥の足跡とその政治史的意義とについては、管見の限り研究の展開はまだ不十分である¹。この欠落は、中国民主党結成の挫折後から 1980 年代に繋がっていく台湾オポジション政治史の理解を不十分なものにしてしているのではないかと考えられる。「党外」の黎明期は、後のオポジションの言論、組織や選挙キャンペーンの様式などが作られていった、いわば「党外」の政治文化の揺籃期でもあったはずだからである。

ここで、オポジションとは、何らかの形で議会政治とその前提となる選挙政治が機能している政治体制において、政府に反対する主張を行う政治勢力を指す²。言うまでもなく、オポジションが存在する政治体制は民主主義的政治体制ばかりとは限らない。台湾の事例を念頭に置けば、政治体制の性格との関連³で、次の 3 種類のオポジションが、この順番で戦後政治史に登場していると見ることができる。

- (a) 自律的な政党結成が容認されていない権威主義的政治体制下の議会における反対勢力。
- (b) 権威主義的政治体制下において、政党として自律的存在は認められているが、制度上選挙による政権獲得への道がふさがれている状態における野党⁴。
- (c) 民主主義的政治体制で複数政党による競争が機能している状況下での野党⁵。

民進党結成以前のオポジションは、言うまでもなく (a) のカテゴリーに入る。台湾の権威主義体制は「領袖独裁」型の党国体制を組織的特徴とし、国民党以外に自立的で活力ある政党の存在認めなかった（いわゆる「党禁」）。したがって、この時期のオポジション史の時期区分は、これに挑戦する野党結成運動（以下「組党運動」）を指標として区分するのが適切であろう。1950 年代後半から蒋介石政権批判を強めた『自由中国』誌に依る外省人自由主義者と地方選挙で国民党に対抗してきた本省人省議会議員などが、1960 年中国民主党の結成を発起した。しかし、この試みは、『自由中国』主宰者雷震（1897～1979 年）⁶の投獄と同志の発禁、組党運動に参加した本省人省議員への様々なハラスメントなどにより力を失い挫折した。これを第 1 次組党運動と呼ぶことができるとすれば、政論雑誌『美麗島』誌を刊行する美麗島雑誌社に党外人士を結集させこれを「党名の無い党」として組織しようとして弾圧（1979 年美麗島事件）を受けた運動が、第 2 次組党運動、そして、事件後比較的速やかに復活した「党外」が、党外候補者推薦団（1981

年11月地方公職選挙)、党外雑誌編集作家聯誼会(1983年9月)、党外候補者後援会(1983年12月立法院選挙)、党外公共政策研究会(1984年5月)、などの組織化の過程を経てついに民進党結成にいたったのが第3次組党運動ということになる。

第2次組党運動挫折から第3次組党運動立ち上がりまでの時間は短く、かつ両者に一定の連続性と継続性があり第3次は第2次の後半段階としてもよいくらいであるのに対して、第1次と第2次の間には断絶がある。中国民主党結党挫折以後も、地方に一定の支持基盤を持つ李萬居(1901～66年)、郭国基(1900～70年)、郭雨新(1908～85年)などの政治家は省議会に生き残り、省議会を舞台として一定のオポジション活動を行ったものの、第2次組党運動に繋がるオポジションの再度の活性化が始まるまで、約10年の年月が必要であった。

そして、この10年の間に台湾内外の大きな情勢の変化があった。よく指摘されるのは、(1)米中接近による台湾の中華民国の国際地位の下落、(2)蒋介石(1887～1975年)から蔣経国(1910～88年)への権力継承、(3)蔣経国による台湾省籍幹部の登用や国政レベルでの限定的な選挙の実施(1969年の中央民意代表増補選挙、1972年以降の同増加定員選挙)、そして、(4)産業化の進展にともなう都市化による都市大衆の増加および教育程度の向上を背景とした発言能力の高い戦後世代の社会的登場などである(若林1992、第五章)。これら4点が連動し合って新しい情勢が生まれ、オポジション再活性化の舞台が整い、その選挙政治にも新世代が登場して、彼らが牽引する形で新しいオポジションの動きが始まる。それが、結果的にみて、1977年統一地方選挙後に始まる第2次組党運動の助走段階となったのである。

小稿は、昨年(2013年)満を持して公刊された『台湾、打拚 康寧祥回憶録』(以下、回憶録)などの関連文献資料や科研費プロジェクト⁷で実施したインタビュー(文末のリストを参照)などに依拠しながら、上記の意味での「党外」黎明期における康寧祥の台頭の意義を検討する。先行研究においては、蕭阿勤が、黄信介と康寧祥の全国的政治舞台での台頭(黄信介の1969年増補立法委員選挙当選、康寧祥の1972年増加定員立法委員選挙当選、両者による『台湾政論』発刊と1977年統一地方選挙における全国巡回選挙応援キャンペーンの展開など)とともに、「党外」の語が「非国民党の、独立政治人物を指すようになった」との李筱峰の指摘(李筱峰1987、122頁)を援用して、こうして作られた「党外」の一語が「一種の政治的団結感」を創造した、という言い方で康寧祥登場の意義をとらえている(蕭阿勤2012、177頁)。

では、この「一種の政治的団結感」の内容とは何か。それは如何にして可能となったのか。蕭阿勤は特段にそれらを検討してはいない。かつて筆者は、蕭阿勤が1970年代における本省人知識人や康寧祥などの1920年代抗日政治社会運動再評価の動きを台湾戦後世代の「現実回帰」思潮の重要な構成部分として指摘したのを受けて、これらの再評価の動きが、「台湾人」族群想像(エスニック・イマジネーション)の「再・再想像」⁸を通じて中華民国体制内における「台湾人」に対する「承認と尊重」を要求する族群政治(エスノポリティクス)の側面を構成したと主張したことがある(若林2008、152頁)。「台湾人」が最初に想像されたのは、日本植民地統治下1920年代抗日政治社会運動における想像、2回目は戦後二・二八事件までの中華民国に対しての想像、3回目(再・再想像)が1970年代である。日本植民地統治下での日本・日本人を他者と

した「想像」は、後の皇民化運動と戦時動員で押さえ込まれ、戦後の「中華民国」と「中国人」に対する想像は、二・二八事件の弾圧とその後続く長期戒厳令体制の下で私的領域の中での語りによって押さえ込まれたのであった（若林 2008、第一章）。

小稿では、こうした台湾史における族群想像の歴史的経緯と 1970 年代族群政治のコンテクストを意識しながら、1960 年代末から 70 年代初めの康寧祥に焦点を合わせて、蕭阿勤の言う「一種の政治的団結感」の内実にアプローチしてみたい。康寧祥は、戦後台湾の国家・社会関係⁹における本省人の台湾性（Taiwaneseness）を体現する「身体」を 1960 年代末からのオポジション政治に投入した、そして台湾の中華民国が対外危機を迎えつつあった情勢の中で、そのような「身体」を街頭に現前させるパフォーマンスでもってオポジション支持者が、台湾性を再・再想像していく触媒の役割を果たしたのではないかと、というのが、小稿が提出する仮説である。この役割を果たすことを通じて康寧祥は、「党外」が「一種の政治的団結感」を獲得するダイナミズムの重い歯車の回転開始に寄与した、換言すれば、台湾のオポジションがその政治的アイデンティティを明瞭にしていく（固有名詞として認知される「党外」の形成）プロセスの開始において重要な役割を果たしたものと考えられる。

康寧祥は行動の人であり、本人に文を以て人を動かす文人へのあこがれがなかったわけではないにしても、政治的自由への束縛が大きく強い状況の下で、リスクを取りながら大衆に向かって演説し、倦むことなくたくさんの人に会い、語ることによって人を動かしてきた人物である。そのための重要なツールとなったのが彼の「台湾語」であった。ここで「身体」と言うのは、この点を意識するためである。

以下、まず、康寧祥のオポジション政治家としての登場までの経歴を検討し、康寧祥がその役割を果たすべき「身体」を如何に備えるに至ったかを確認する。ついで、康寧祥がその「身体」を如何に街頭に投入したかを検討する。

なお、本報告が資料的な面でも分析方法の面でも、依然試論的なものであることは、あらかじめ確認しておきたい。台湾オポジション研究自体の状況に加えて、この時期に関する筆者自身の公刊資料の検討や関連人物へのインタビューも未だ不十分であり、また何よりも取締側の国民党政府情報治安機関側の資料や周到な情報収集を行っていたと想定される米国在台公館の報告などの資料が未だ十分参照できる状況にない。特に、康寧祥の選挙キャンペーンの具体的内容については、今のところ本人の回想に多くを頼らなければならない、その「身体」を直接に検討するに足る康寧祥の選挙演説の音声や映像資料などは未発掘である¹⁰。

にもかかわらず、「康寧祥」は何らかの形で今着手されるべき台湾政治史研究の課題の 1 つであることは確かであろう。資料の不足にもかかわらずあえて一石を投ずる所以である。

第 1 節 オポジション政治家康寧祥の誕生

1. 生い立ち

康寧祥は、台湾がまだ日本植民地統治期下にあった 1938 年、台北市は萬華（艋舺）の、当時

堀江町と呼ばれた街の一角に生まれた。堀江町（現雙園区の一部）は、南北縦貫鉄道萬華駅の裏側の一帯で、当時の台北市 64 町の 1 つであった（蘇碩斌 2010、284-287 頁）。現在の艋舺大道、汀州路、中華路、西藏路、萬大路に囲まれた地区にあたる。現三元街と西藏路であるところがかつて水溝であったことから堀江町の名がある（回憶録、17 頁）。

父康振福(?? ~ 1975 年)は、桃園県の小作農の家に生まれた。少年の頃台北に出て日本人がやっていた「藤田製菓」の徒弟となって煎餅とビスケットの作り方を学び、結婚とともに堀江町に移って独立した。ビスケット屋で暮らしが立つようになり、彼を頼って周囲には何人か親族も移り住むようになった（回憶録、16 頁）。

日本統治期、「城内」が統治階層をなした日本人が集住した地区であったのに対して、萬華は大稻埕（黄信介の出身地）と並ぶ清朝時期からの台湾人の集住地区であり、生活の場を都市に求める康振福のような流入人口の受け皿となる地区ともなっていた。それ故か、外来統治の中核となる建築物＝台湾総督府（戦後は中華民國總統府）から徒歩二三分程度の距離ではあったが、台湾語（福佬語＝閩南語の通称）が話され台湾的色彩が濃厚な生活が戦後もずっと営まれている地域でもあった（回憶録、22-23 頁）。商業で財をなした者がいないわけではないし、康振福の小さな成功のように、萬華の社会にも台湾社会総体の経済成長と上向的社会流動性が反映されてはいた。とはいえ、康寧祥の成長期には萬華は概して労働者と小商人の街、「市井小民の街」（インタビュー記録 李筱峰氏）であった。

1945 年 4 月近所の堀江国民学校（後の雙園国民小学校）に入学したが、日本の敗戦で統治者が交代し数ヶ月で教育言語の転換を経験することになった。中学校は、列車で淡水河を超えて樹林中学に通った。歴史の先生に後に随筆家として名をなすも筆禍にあうことになる郭衣洞（筆名柏楊。1920 ~ 2008 年）がいた（回憶録、33 頁）。高校受験には失敗して、しばらく家業を手伝っていたが、勧める人があって私立延平中学の補習学校に入った。同級生に当時著名な無党派政治家であった郭国基の次男郭蓋世がいた。その縁で政治活動のため台北滞在の多かった郭国基とも知り合い、よくその経験談を聞くようになった（回憶録、41-42 頁）。郭国基は康寧祥の政治的デビューの直後に亡くなってしまった（1970 年 5 月。謝欣純 2002、201 頁）が、オポジション政治における康寧祥にとっての最も身近で重要な先達であったといえる。

康寧祥の家と日本統治期に社会運動に参加し投獄の経験もある台湾史家で童話作家でもあった王詩琅（1908 ~ 84 年）の家とは、狭い路地を挟んで康家の台所と王詩琅の書斎とが向かい合わせの隣同士であり、康寧祥は高校生の頃より王詩琅から台湾の風物や日本統治期の歴史、特に 1920 年代の政治社会運動や関連人物のもろもろの話を聞くようになった（回憶録、27-29 頁）。台湾の学生たちが台湾史に関心を強めるようになった 1970 年代後半から 80 年代にかけて、王詩琅は台湾史の生き字引と称される人物であった（インタビュー記録 吳密察氏）。

延平中学補習学校卒業後は、台湾省立法商学院公共行政学科に進学した。数年後に政治的行動を共にすることになる黄信介も同学院で学んでいた。同校は、康寧祥卒業の年に中興大学の法商学院に昇格した。大学卒業後屏東で兵役に就いたが、その間に継母が危篤となりその死に目に間に合わせると急遽結婚した。兵役終了後日本に留学するつもりでいたが、それは断念して職を

探すことになり、国営企業の中国石油に入社、ガソリンスタンドの従業員となった。中国石油では、数年で「班長」（現場責任者）となった（回憶録、44-49頁）。後年彼がしめした弁舌の才、外交的で世話好きな性格と行動力などを考えれば、大学在学中にも兵役中にも国民党入党を誘われたであろうと考えられるが、入党しなかった。国民党員でない国営企業従業員の出世はそこまでだった。

2. オポジション政治家康寧祥の誕生

1967年、中華民国「臨時」首都の台北市は台湾省管轄下の市から台湾省と同格の行政院直轄市に昇格した。それとともに台北市長は、台湾省政府主席と同様に民選からはずれ行政院任命のポストとなり、同年中に任期の切れる市議会議員は2年任期が延長されて、1969年秋に選挙されることとなった。直轄市に昇格したことで、市議会議員の学歴資格が高卒以上となった。このことが康寧祥にチャンスをもたらした。

1950年以来実施されてきた台湾の各種地方公職選挙では、地方ごとの事情によって割合は異なるが、国民党が如何に浸透を図ろうとも常に少なくとも15～20パーセントの国民党候補への投票を肯んじない有権者が存在していた（顔志栄1993、142頁）。萬華の中でも「堀江町」はそのような傾向が明確な地区で、戦後の台北市議会議員選挙では「無党無派」議員を輩出し続けていた。康振福のビスケット屋の1階の客間は、近所の人が寄ってきては床屋政談に興ずるたまり場であった。康寧祥は少時から人々が台北の政治や政治家のもろもろを語るのを耳にしながら育ち、長じては自分でも盛んに意見を述べるようになったという（回憶録、32頁）。

康寧祥に巡ってきたチャンスとは、「堀江町」から出ていた台湾市議会議員の周得福が上記の新学歴基準によって1969年選挙に出馬できなくなったことである。無党派陣営で選挙を手伝ってきた近所の者たちから、出馬を進められた。その理由は、弁が立つ、大卒である、国民党に入っていない、の3点であった（回憶録、49頁）。

康寧祥は30歳になっていた。父は反対し自身も迷ったが、結局は出馬を決断した¹¹。オポジション政治家として選挙に出たいとの意志は、法商学院在学中からしだいに芽生えていたものと推測される。その頃には政治や歴史に関する台湾語の語彙の獲得と政治演説の自己訓練をするようになっていたからである。上記のように高校生の時から郭国基と知り合いで彼の日本統治時代の経験や戦後選挙政治の話はよく聞いていた。延平補習学校在学中に郭の選挙のピラ配りを手伝ったこともある（回憶録、38-43頁）。郭国基が選挙時の警句として使って後に人口に膾炙するようになった台湾語の諺¹²とそこの込められた政治的含意、すなわち外来者支配に対する不公平感と歴史的悲哀の感覚は、早くから感得していたと推測される。

高校生の時から始まった背中合わせのお隣である王詩琅との台湾史についての会話も、2人の世代の違いからして台湾語で行われたに相違ない。後の読書（葉榮鐘などの著作¹³）で補われたにせよ、これらの歴史知識は当時の公教育のカリキュラムには入っていなかったのであるから、選挙政治に身を投じるようになって自身が常に口の端に載せるようになった蔣渭水、林獻堂、蔡培火、連温卿などの歴史的人物の名や事跡などの知識を、康寧祥はまずは台湾語で知り、身につ

けていったのである。

さらに父の影響がある。法商学院2年生のある日、父康振福が『聯合報』の社説を音読してくれと言う、しかし、現代政治用語が入った中国文は台湾語ではどうしても読み通せない。父は「大学生になって新聞も読めない」と嘆き、息子を龍山寺付近に住んでいた張国財という漢学者のところへ連れて行き、入塾させた。康寧祥はそこで2年ほど「三字経」からはじまって「四書五経」まで漢文を台湾語で読む勉強をした（康寧祥口述、陳翠蓮訪談2010、3頁）。これより先、延平中学補修学校では、台湾大学文学院教授の黃得時（1909～99年）が非常勤講師をしていて、康寧祥は黃が中国古典を台湾語で朗読するのを聞き、俗に台湾語は「有話無文」（口語表現があるだけで文章語表現はできない）だというのが、実はそうでもないとの感触も持っていた（回憶録、36頁）。加えて、自分自身も台湾語の演説能力を鍛える努力をした。家で布団を被ってBBC、VOA、NHKなどの閩南語ニュース放送を聞き、国際時事用語を台湾語でどういふのかを覚えた。また、省議員としての郭国基がアメリカ文化センターからアメリカ大統領の演説(State of the Union address)などの中文訳を贈呈されているのを知り、それを貰ってきては、台湾語に読み替えて演説する練習をしたりした（回憶録、53頁、インタビュー記録 康寧祥氏(1)）。

俗に選挙に「三バン」ありと言われる。地盤は無かったわけではない。だが、それも「堀江町」の「無党無派」の国民党嫌いの支持者くらいのものであった。もちろん国民党にすり寄りもせず、また何らかの財力有る有力者の後ろ盾も無かった。「堀江町」の外では全くの無名であった。金も無かった（インタビュー記録 康寧祥氏(1)）。借りてきた宣伝カーに載せる看板は妻が書き、ビラは古新聞に自分の名と郭国基の警句を印刷した（回憶録、52頁）。

他の候補者に比して優位だったのは、萬華育ちで、「市場の言語」以上の豊富な語彙の台湾語で政治と台湾史を語り通すべく自己訓練した「身体」のみであった。康寧祥の回想によれば、大学生の時植民地統治期に社会主義者連温卿（後述）が「外来の統治者がある民族を消滅させようとするれば、その言葉を消滅させようとする」と述べていたことを知り、いっそう台湾語の自己訓練に身を入れ、台湾語で発言できる場面ではできるだけ台湾語ではなすことに努めたという（回憶録、67頁）。

規制の多いキャンペーン活動にも工夫をこらした。当時、市議会議員選では街頭演説が認められていなかったため、歩く速度で宣伝カーを行ったり来たりして聴衆が動かなくてよいようにして演説した。手弁当の運動員が警察のハラスメントを受けると釈放されるまで警察で粘った。警察の干渉に果敢に対抗する、国民党をあえて批判する若い候補がいるというのでしだいに評判になった（回憶録、53-55頁）。そのためか、キャンペーン7日目新公園（現二二八平和公園）の野外音楽堂での公設演説会に、中国民主党結党運動に参加したことのある省議会議員の郭雨新、李秋遠（1921年～）、台北県議会議員の黃玉嬌（1919年～）、当時台北市議会議員だった黃信介などが応援に来た。そして翌日そろって堀江町の自宅を訪ねてきて、近所中大騒ぎとなった（回憶録、55頁）。当時の党外人士の名のある人たちがそろってまだ全く無名だった青年候補者をわざわざ自宅まで訪ねて来たのである。オポジション青年政治家としての康寧祥の誕生を告げる出来事だった。

11月15日の投票では、19名の候補者中9位の得票で当選、無所属候補では唯一の当選者であった（中央選挙管理委員会 1984b、136-137頁）。当時国民党台北市党部主任委員だった林金生は、康寧祥の当選が国民党にとってこの選挙の唯一の遺憾であったと述べたという（回憶録、55頁）。当選後、アメリカ国務院の招待により訪米旅行して帰国すると、康家に入る小道に特務が配置されて康家への人の出入りを監視するようになり、電話も盗聴されるようになった（回憶録、95頁）。

第2節 政治的触媒としての康寧祥の「身体」

—選挙戦の街頭で「台湾史」を語る「草の根党外」の青年

1950年に地方公職選挙を限定的に開放して以後、国民党がなかば台湾の政治風土に自生した「地方派系」（地方派閥）と称される準政治団体を培養して選挙政治のコントロールに当たってきたことは、すでによく研究されている（たとえば、陳明通 1995）。一方、陳忠信は、こうした国民党の公認を受けて当選者を出していく「主流地方派系」のほかに、上記の少なくとも15～20パーセントは存在していた非国民党票を吸収して選挙政治と地方政治に生存し続ける「支流地方派系」も存在していたが（高雄県の余登発 [1904～89年]、宜蘭県の郭雨新、嘉義市の許世賢 [1908～83年]、雲林県の李萬居などが典型）、台北市の大稻埕と萬華にそれぞれ一定の基盤を持つ黄信介と康寧祥も、この「支流地方派系」的な性格を持つとしている（陳忠信 1990、58頁）。

時に「無党無派」を標榜し、時に中国青年党や中国民主社会党（民社党）などの党籍を利用して¹⁴選挙政治を戦ってきた「支流地方派系」的オポジションは、後に「草の根党外」とも称される¹⁵。黄信介はもちろん康寧祥もまたこの「草の根党外」の戦後世代の新人の1人として台湾のオポジション政治にデビューしたのであった。だが、この新人はそれまでの「草の根党外」とは少し違っていた。

台北市議会議員選挙に踵を接して、中央民意代表の補充選挙（非改選の第1期議員11名を「自由地区」において選出し補充する）が行われることになり、台北市議会議員の黄信介が台北市選挙区（ほかに台湾省が2つの選挙区に分けられた）から出馬し、市議会に当選したばかりの康寧祥は請われてその「助選員」となった。市議会議員選挙と異なり選挙区が大きくかつ街頭演説が認められているので、台北市内の至る所で演説できるのが康寧祥にとっては魅力であった（回憶録、64頁）。

候補者の黄信介は親和力に富んだ性格で聴衆を引きつけ楽しませる生来の語り口を持っていた。その語り口で「国民党を罵れば罵るほど票は出る」というのが黄信介の選挙戦略といえは戦略であった。これでももちろん前記の15～20パーセントに訴えることはできる¹⁶。だが、康寧祥はこれだけでは不足だと考え、「台湾史」を語ることにした。それも、それまで公的な場で語ることがあまり歓迎されていない日本植民地統治期の1920年代抗日政治社会運動の人物や事跡を主としたのであった。

『回憶録』によれば、そこにはまた『自由中国』組党運動（第1次組党運動）についての康寧祥自身の総括があった。同誌の鼓吹により「自由・民主」の理念とそれにもとづく国民党独裁批

判はインテリにそれなりに浸透したとしても、民衆の後ろ盾を持つことができなかった。また外省人中心の『自由中国』人士の中には、組党運動を進めて台湾人の力が強まることに警戒感があった。これではいくら自由、民主を唱えても国民党政権の反共体制の装飾品になるだけで、独裁者は何時でも叩き潰すことができる。民衆の後ろ盾を得るには、「台湾の先人の抗日の事跡を語り、『台湾人意識』を喚起し、ヨーロッパのルネッサンスでギリシャの先賢の思想を再吟味することによって中世の暗黒から抜け出たように、われわれ台湾人も先人が外来支配者に抵抗した経験から『自分自身の主人となる』ための智恵と勇気を探し出す」ことが必要であるし、可能であると考えたのである（回憶録、66頁）。

残念ながら、この選挙での、またその後1970年代の康寧祥の街頭での語りの詳しい内容および具体的な状況を第一次資料でうかがうことは、今のところできない¹⁷が、康寧祥は、候補者と台湾史、演説するその場所と台湾史における先人の事跡、そしてさらには台湾の命運を結びつける語り方をした。康寧祥は黄信介の親戚の者から、黄信介が同じく大稻埕の人である連温卿（1894～1957年）の甥（母連好が連温卿の妹）であることを知った。連温卿の名もその日本統治期台湾人抗日政治社会運動において果たした役割も王詩琅から聞いて周知であった（回憶録、66-67頁）。連温卿は、エスペラントで山川均に私淑した社会主義者で、戦前1920年代抗日運動ではその推進機関だった台湾文化協会の左右分裂の際に左派を率いたリーダーであったが、康寧祥は台湾史の語りの中では左右の別を重視しなかった（もちろん、「左」に踏み込むことは政治的タブーでもあった）。黄信介を支持することはその伯父の精神と抗日の先輩たちの気概を引き継ぐことだとして、黄信介を連温卿に結びつけると、ついで林献堂（1881～1956年）を、台湾文化協会を、台湾議会設置請願運動を語り、さらに台湾民衆党を語り、さらにそのリーダーだった蔣渭水（1890～1931年）に語り及び、戦前の抗日人士による『台湾青年』、『台湾民報』などの雑誌・新聞の発行と言論活動にも言及した（回憶録、68-69頁）。

また、かつて台湾文化協会の設立大会が行われた静修女子中学校近くの涼州街（通称「打鐵街」）では、文化協会による「文化講演」の盛況を語り、承德路での演説では、付近にその本部が置かれていたことがある台湾民衆党の活動を語り、かつて「太平町」と呼ばれた延平北路では、そこに医師として「大安医院」を開設していた蔣渭水の事跡やその「大衆葬」を語り、萬華の龍山寺では、1895年清朝軍撤退時の略奪で混乱した台北の情勢を收拾するためすでに北部海岸に上陸していた日本軍に早期台北入りを促す使者を派遣する有力者の相談が当時ここ龍山寺で行われたことを紹介し、他人の言うままに「殺朱拔毛」、「漢賊不兩立」を叫ぶだけではだめで自分の運命は自分で握らねばならないと訴えた（回憶録、70-71頁）。

康寧祥の街頭での台湾語によるこうした台湾史の語りは、ただちに少なからぬ反響を呼び起こしたようである。これも『回憶録』によるが、植民地時期からの台湾人集住地区である萬華、大稻埕、大龍峒の老人達の中では「誰々の先祖が康寧祥の演説に出てきた」といった話題が広がり、演説の回数を重ねると学者や学生、そして日本植民地時代にかつて政治社会運動に参加したことのある人までが聞きに来て、演説の後も残って康寧祥と議論するようになった。後に李登輝・曾文惠夫婦、張俊宏、城仲謀、黄大洲、陳儀深、許陽明、許添財¹⁸などの人々が当時演説を街頭に聞

きに行ったと本人に語ったという（回憶録、71-72頁）。さらには、高雄からバスをしたてて聞きに来て録音して帰って知り合いに聞かせたと後に語る友人もいた（回憶録、71-72頁）。また、康寧祥が操る台湾語そのものもインパクトを持った。当時学生として聴衆の1人であったと考えられる歴史学者周婉窈は、「康寧祥は、時に優雅で時に平俗な純粹の台湾語を使って演説し、少なからぬ閩南系台湾人に、〔台湾語は「国語」に比して一等下の言語であるとの〕言語観を変えさせることになったのであった」と回顧している（周婉窈2013、244頁）。

選挙の結果、黄信介は台北市選挙区（定員4名）5万8千票強を獲得し定員4名の最下位にすべりこみ当選した（候補者全11名）。党外人士ではこのほかに郭国基が台湾省第2選挙区でこれも最下位当選している（中央選挙管理委員会1984a、598-600頁）。ただし、前記のように郭は立法院に登壇することなく死去した。

1972年春国民大会は中央民意代表の「増加定員選挙」（「中華民国自由地区」定員の増員とその定期的部分改選制度）の制度を定める「叛乱鎮定動員時期臨時条項」を増訂し、12月に第1回の選挙が実施されることとなった。康寧祥は、この「増加定員選挙」に台北市選挙区（定員5名）に出馬した。

すでに触れたように、これより先、1971年10月には台湾の中華民国は国連から脱退、中華人民共和国との国際地位の逆転が明らかとなっていた。国民大会が新選挙制度を決める時期は、ちょうど米ニクソン大統領の歴史的訪中が実現し、東アジアの国際政治が騒然としているころであった。1972年6月蔣経国は行政院長（首相）に就任し蒋介石からの権力継承に一段落つけたが、それに先立ち権力掌握の背景作りとして『大学雑誌』を舞台に一定の改革言論が容認されていたことから、『自由中国』以来の政治改革言論が再び活性化していた。『大学雑誌』の言論はまもなく押さえ込まれるが、新しく国政レベルに開いた選挙政治の空間を利用して、オポジションは「党外」へと発展していくのである。

1969年選挙で台湾人先人の抗日政治社会運動の事跡を語ることは、国民党統治下の政治的自由、言論の自由の抑圧に対する間接的批判であったといえるが、1972年選挙のキャンペーンでは、康寧祥は、またも台湾史を語るとともに、より直接的な国民党政権批判を先鋭化させ、体制の正統性の問題にも及んだ。曰く、国連から追い出されているのに外蒙古まで自分の領土だといっている。実質は大陸反攻を放棄しているのに1948年選出の国会議員が改選されないままなのは不公平だ。台湾人に歓迎されているテレビの「歌仔戲」や「布袋戲」を何故制限するのだ、このまま行けばかつて日本の「皇民化運動」が目指したように我々の言語は滅ぼされる。台北市の予算書を調べると国民党の民衆サービスセンターや反共救国青年団などへの補助がかなりの額に上っている、などなどである（回憶録、111-114頁）。これらは、1980年代の「党外」が選挙キャンペーンや「党外雑誌」の言論の中で次々と繰り出した台湾人視点の国民党批判の論点を想起させるものである。

こうした康寧祥の選挙演説は、台北の街頭に多数の聴衆を動員した。かつて、台湾の地方選挙でも、台北市長に出た高玉樹の巧みな弁舌や郭国基の個人的なカリスマが「萬人空巷」、「萬頭攢動」（街中の者が繰り出し、広場をぎっしり埋める）の場面を作り出したが、康寧祥はそれを再現した。

今回も聴衆は台北市民に止まらず、中南部からバスを仕立てて聞きに来る聴衆があり、戻って知人に聞かせるために、演台には録音機がたくさん並んだという(回憶録、116頁)。

康寧祥の街頭演説の様子について、実見者の回想がある。南部麻豆鎮出身の李筱峰は1972年当時台北の政治大学の2年生で、すでに『大学雑誌』に文章を書いたりしていた。同年末自発的に康寧祥の選挙事務所に出向いて選挙のピラ配りを手伝った。

1972年、台北の街頭に立って康寧祥の演説を聞いたが、その時私は蔣政権をこんなにも赤裸々に批判する人がいるのを初めて目にした。聴衆は皆酔っているかのごとくで、涙を流して聞いている人もいて、町中の者が皆外に繰り出す盛況(「萬人空巷」)だった。「台湾にこんな人物が出現した、台湾にも希望がある」という思いが突如脳裏に浮かんだのだった(李筱峰1999、174頁)。

鄭鴻生は当時台湾大学の学生で「左派」をもって任じていた。1972年選挙の際台大学生が発起した「学生選挙投票開票立会人参加運動」に加わった。学生が萬華の選挙事務所に運動の趣旨を伝えに訪れると、康寧祥はただちに賛同し選管から割り当てられた立会人の枠を鄭らのグループが推薦する者に充てることを承諾した(鄭鴻生2001、174頁)。そして、鄭は台湾大学正門前に演説にやってきた康寧祥の演説の様子を次のように回想している。康寧祥の小さな宣伝カーが正門前に停まり新生南路に向けて臨時の演説台がしつらえられると、無数の民衆がより集まってきた。彼は背後のキャンパスを指さしながら、流暢な「閩南語」でこの国家の最高学府もかつては「台北帝国大学」でももとは日本帝国主義が台湾人民を搾取し東南アジアを侵略するために作った大学だったと指摘した(鄭鴻生2001、180頁)。

これは本当に人の胸に響く出だしだった。ついで彼は民主政治の理念を述べるとともに、大学生が統治者、侵略者に仕える役割から脱却して、社会と人民に感心を寄せるべきで、象牙の塔に閉じこもってはいけけない、と呼びかけた。こうした台湾大学の位置を日本植民地統治時期の台北帝大までもどしてとらえ返す視野は、1970年代の初期には相当に衝撃的なものであった。特に1人の「草の根闘士」の口から述べられたのだから、当時ちょうど左派の理念を吸収してやっとな楊逵〔1905～85年。戦前の農民運動活動家、作家〕を発見していた我々にとっては、感動的な呼びかけで、蔣渭水の再来かと思われたのだった(鄭鴻生2001、181頁)¹⁹。

1977年10月、翌月の統一地方選挙で台湾省議会出馬を控えて『我的沈思與奮闘』²⁰を出版した張俊宏は、康寧祥の選挙演説の衝撃を次のように総括している。想定されているのは明らかに1969年末と72年選挙であると考えられる。

康寧祥の時代になって前者〔高玉樹や郭国基が活躍した時期〕とは大きな違いが生じた。彼

は〔大稻埕の〕遠東劇場〔戲院〕や台湾大学の門前での演説で、「台湾歴史の使命感」をキャンペーンの主題に据えた。これは党外の大衆運動に歴史的使命を継承するのだ、という高貴な感覚を与え、相当に大きな衝撃力をもって、党外大衆運動を新たな境地に引き上げたのであった（張俊宏 1977、192-193 頁）。

1970年代末に党外の黎明期が終わり「党外」の輪郭が明確になってくると、康寧祥はその中では保守的な「穏健派」と見なされるようになっていくが、この時期には、斬新な衝撃力をもって登場したのであった。

康寧祥が、李筱峰のようなすでに反国民党的政治意識を持っていた大学生にとっても「赤裸々」な体制批判者として映ったとすれば、当然情報治安機関において最も警戒すべき「過激分子」であったとしても不思議ではない。蔣経国の伝記作家 J. テイラーによると、1972年キャンペーン中康寧祥は2度にわたって「反国策」違反の警告を受けており、蔣経国は、オポジション候補者の「挑発的な集会」の様子の詳細な報告と康寧祥を含む人物の選択的な逮捕の提案を受けていた。王昇（国防部総政治作戦部主任）は、康寧祥は共産黨員だと蔣経国に警告した。蔣経国はこれを無視したという（Taylor 2000, p. 311）。しかし、台北市議会議員当選後から始まっていた監視体制は24時間態勢に格上げされ、電話は盗聴され、身边にはスパイが送り込まれるようになった²¹。

結び—康寧祥の新しい「草の根」性

小稿は、関連する資・史料の掌握が不十分な中で、あえて康寧祥の「身体」というレベルを想定し、その1960年代末から70年代初めの選挙におけるパフォーマンスを観察するかたちで、康寧祥の台頭の台湾オポジション史における意義を考察してきた。

これまでに記してきたことをまとめれば、康寧祥の「身体」とは、(1)外来の政治権力中枢の置かれた台北市の中では、土着的な「台湾的なるもの」と結びつけられてイメージされる傾向の強い萬華に生まれ育った青年であること、(2)進学競争の成功者ではなく優等生として国民党体制のレトリックは身につけてもその価値観の内面化は深くはなく、「堀江町」の国民党嫌いのマインドに沿い、また郭国基などオポジション政治家の訾咳に接し、実際にも国民党入党を拒否し続けつつ参政の意欲を燃やした青年であったこと、(3)そして何よりも古典語彙を挟みながら、政府の施政批判から国際情勢までを、さらには台湾史の人物と事跡とを、ほとんど台湾語で語り通す言語能力を、台湾史の生き字引ともいえる人物を近隣の知り合いとして持つという偶然にも恵まれて、自己訓練を通じて獲得していたこと、これらによって構成されていたといえる。(1)と(2)は康寧祥の「草の根」性であるが、(3)は康寧祥の新しさである。

「草の根」性は、国民党の文化エリートが解釈権を握る中国性に対して一定の対抗性を有するところの即事的な台湾性を含意していた。そこに康寧祥は、台湾史の語りを加えた。それはオフィシャルな中国ナショナリズムの語りの枠組みに正面から挑戦するものであったとは言えないが、

ほとんどの語彙を台湾語で語り通し、同時に鋭い国民党政権批判とを並行させることによって、台湾性を語る新たな言説を構成し、党外の新たな動員力の源泉となっていくと考えられる。未だ後年の「党外」の「台湾前途の住民自決」というような政治的共同体の範囲を主張する言説とは結びついていないがゆえに、それは台湾ナショナリズムの言説であったとまでは言えない²²が、「台湾人」に対する「尊重と承認」を要求する「族群言説」ではあったと言えよう²³。そのような言説を、康寧祥はその「身体」によってまずは街頭に作り出していった。これが蕭阿勤にいう「政治的団結感」の中身だったのではないかと想定されるのである。こうした内実を持った「政治的団結感」の醸成が、党外が「党外」となっていくプロセスの重要な一部分であったといえるのではないだろうか。

『回憶録』は、1972年選挙戦終了時の感想として、康寧祥を立法委員に押し上げた「大衆の熱気の中に1つの潮流がまさに巻き起ころうとしていることを深く感じた」と記している(回憶録、118頁)。33歳の萬華の青年は国会議員となった。青年康寧祥は職にかなう国会議員になるべく、まさに奮励努力した(康寧祥口述、陳翠蓮訪談2010、9-25頁)。ただ、時代が彼に求めたのはそれだけではなかった。というよりも、どちらかと言えばそれ以外のもの、つまり彼自身の「身体」が触媒となって巻き起こりつつあったその「1つの潮流」をどこに、どのように導くのか、という歴史の波濤に立つ果敢なリーダーシップをこそ求めたとも言える。歴史は時に思わぬ人に思わぬ負荷をかけるものなのかもしれない。オポジション形成においてそこにリーダーとして押し上げられてしまった康寧祥のリーダーシップという問題が生じた。その後の台湾オポジションの歴史は、この問題を1つの軸として展開していくことになるのである。

注

- 1 わずかに許瑞浩(2002)があるが、それも康寧祥が主宰した『台湾政論』に関するものである。これには、康寧祥口述、陳翠蓮訪談(2010)のほかは、これまで康寧祥本人が回想などの発表に消極的であったことも影響しているだろう。しかし、昨年(2013年)末に浩瀚な康寧祥論述、陳政農編撰『台湾、打拚 康寧祥回憶録』(台北、允晨文化)が刊行された。今後は康寧祥に関しても研究の機運が出てくるものと期待される。小稿はその先鞭を期すものである。
- 2 選挙と議会以外の手段で直接に体制を打倒しようとする革命運動は、オポジション運動と関連があるにしても、一応区別して考える必要がある。台湾に関して、たとえば海外台湾独立運動などは、台湾内のオポジションに関連する限りにおいてこれを扱い、直接の検討の対象とはしないこととなる。
- 3 同じく権威主義体制ないし民主主義体制に分類しうる政治体制においても、異なった性格の政党システムが存在し得るし、それによりオポジションの存在にも異なった条件付けがなされる。この点にかかわる台湾事例については、岸川毅、松本豊貴が研究を進めているので、その研究成果を待つてさらに議論の整理を行いたい。
- 4 台湾の戦後政治史では、1986年9月「党外」による民進党結成から1996年第1回の総統直接選挙の成功までが、政治体制の民主化期であるとみなせる。蔣経国は「党外」の民進党結成を容認したが、1992年末に終了した国会全面改選後までは、国会は国民党籍の非改選議員が依然圧倒的多数を占める状態であった。したがって、結成から国会全面改選実現までの民進党はこの意味のオポジションであったと見なすことができるだろう。
- 5 1996～2000年の民進党、2000～08年の国民党、親民党、2008年以降の民進党などは、(c)の意味でのオポジションである。ただ、この間、1991年末に非改選の中央民意代表の退職が実現し、同年末には国民大会代

表の、1992 年末には立法委員の全面改選が実現して、国政レベルで議会政治は総統直接選挙を待たず民主政治上の機能を発揮し始めているので、1992～96 年の民進党、1993 年結成の新党（党名）も、この意味でのオポジションであると解釈できる。

- 6 以下、関連人物の生没年は主な経歴などは、許雪姬総策画『台湾歴史辞典』（台北、遠流出版、2003 年）、当該人物所属機関のウェブサイト、および Wikipedia の関連項目の記述によっている。煩瑣にわたるので以下個別に根拠をしめすことはしない。
- 7 平成 24 年度科学研究費（基盤研究（B））「台湾政治における反対党の誕生：国際体制・孤立国家・市民社会とナショナリズム」（研究代表者 若林正文）。
- 8 若林（2008、152 頁）は「再・再創造」とするが、誤記であった。
- 9 筆者はこの点を、戦後台湾国家は台湾土着社会との関係において遷占者国家の性格を持ったととらえている（若林 2008、第二章）。
- 10 筆者が把握し得た康寧祥の最初の音声資料は、1983 年末増加定員立法委員選挙時の演説である（呉三連台湾史料基金会蔵、テープ番号 013443A、同 B）。この点については李筱峰教授の教示を得た。記して謝意を表する。
- 11 立候補したのは、台北市第 2 選挙区（古亭、雙園、龍山、城中の 4 区）。選挙制度は中選挙区制で、定員 13 名に 19 名が立候補した（中央選挙管理委員会 1984b、132-133 頁）。
- 12 「乞丐趕廟公」（乞食が堂守を追い出す）、「豆油分你搵，碟子捧著走」（醬油をつけさせてやったら皿ごと持って行かれた）など（回憶録、42 頁）。
- 13 法商学院在学時には台中の中央書局まで出かけて、葉榮鐘の『半路出家集』や『小屋大車集』などを買い求めて読んだ（回憶録、45 頁）。
- 14 青年党と民社党は、国共内戦期に国民党が進めた憲法制定をボイコットせずこれを支持したため、中華民国中央政府の台湾移転後も厳しい「党禁」（新規政党結社禁止）の実施にもかかわらず政党組織の継続が認められていた。台湾省議会で活躍した党外人士を例にとると、郭雨新、李萬居などは青年党に、呉三連、許世賢、李秋遠などは民社党籍を有した（岸川毅氏の教示による）。
- 15 「草の根」とはどういうことか。李筱峰は「彭明敏 [1923 年～。東京帝大卒、戦後台湾大学政治学科主任など歴任後、『台湾人民自救宣言』事件で亡命、1992 年帰国、1996 年第 1 回総統直接選挙民進党候補] と比べれば明らかに康寧祥は『草の根』、康寧祥に比べれば黄信介はもっと『草の根』と評している（インタビュー記録 李筱峰氏）。
- 16 姚嘉文の回想によれば同じ話題で国民党を批判しても黄信介が話すと聴衆の爆笑が絶えず、このように国民党を罵ると聴衆は快感を感じていたという（姚嘉文 1999、230-231 頁）。
- 17 後に触れるように、詳しいメモの類が台湾警備総司令部など情報治安機関の檔案に残されているものと推測されるが今のところアクセスは困難である。また党外の側も 1970 年代はまだ候補者の演説の録音・録画を自身では残そうとはしていなかったようである。『回憶録』によれば南部から聞きに来た者の中には知り合いに聞かせるために録音をとっていった者もあるとのこのことであるが（後述）、これらはまだ「出土」していない。報告者が確認した康寧祥の街頭演説録音の最も早いものは、注 10 で示したように呉三連台湾史料基金会所蔵の 1983 年末の増加定員立法委員選挙のものである。選挙キャンペーンの宣伝物が研究機関などに所蔵されている可能性もあるが未調査である。
- 18 張俊宏（1938 年～）は、『大学雜誌』編集委員、省議會議員、美麗島事件被告を経て、民進党秘書長、立法委員など歴任、城仲謀（1938 年～）は法律家、台湾省政府委員、考試委員などを経て司法院大法官、行政院法務部長など歴任、黃大洲（1936 年～）は、李登輝の台北市長期に抜擢され台北市政府秘書長、後に代理市長、市長などを歴任、陳儀深（1954 年～）は、中央研究院近代史研究所研究員、二・二八事件、白色テロ、民進党組党運動などに関して広範な口述歴史採取活動を展開、許陽明（1952 年～）は康寧祥立法院助手、民進党報総編輯などを経て民進党副秘書長、台南市副秘書長など歴任、許添財（1951 年～）は、中国文化大学銀行学教授などを経て、台南市長、立法委員など歴任。
- 19 鄭鴻生（2001）は改訂版が 2013 年に出ており、丸川哲史氏による邦訳（『台湾 68 年世代、戒嚴令下の青春——釣魚台運動から学園闘争、台湾民主化の原点へ——』作品社、2014 年）が出ている。改訂版では、この引用部分には補足的な文言が追加されているが、小稿に引用したコンテキストを変更する内容ではないので、初版から筆者が訳出した。
- 20 呉密察氏によれば、この本の内容を実際に執筆・編集したのは、当時台湾大学歴史学科在学の数名の学生だった（インタビュー記録 呉密察氏）。
- 21 後の話になるが、康寧祥が 1970 年代末党外雑誌『八十年代』を運営していた時、学内国民党組織に吸収され

- ていた女子学生が調査局にリクルートされて康寧祥の娘の家庭教師として身近に近づき、同誌の原稿などをコピーして調査局に流していた。このことを後になって本人が著書で告白している（高麗娟 2008）。
- 22 別の観察として、アメリカ側の記録がある。1971年7月15日ワシントンと北京で同時に翌春のニクソン米大統領の訪中が発表され世界に衝撃を与えたが、その前後駐台北米大使館は台湾の各界のエリートに時局についての感想をオフレコで尋ねている。康寧祥も8月20日に政治担当参事官の訪問を受けている。今後の20年間に大陸との統一（eventual merger）があると思うかとの問いに、康寧祥は「我々は統一はいやだ、独立したい」と返答したという。ただし、参事官の報告は、彼は現実の行動に関しては慎重であり、「彼は台湾独立運動の支持者ではなく、オポジションのリーダーの1人であり、長期に国民党に抵抗しようとしている。責任あるオポジションの、より急進的な一方に属し、若い台湾人の団体を慎重に作って行って将来のある日政府権力を受け継ぐことができるようになることを希望している」と観察している（王景弘編訳 2013、96-97頁）。
- 23 前引の若林（2008）では、立法院で質問に立った康寧祥と蔣経国行政院長との台湾歴史問答を事例にこの点を論じた。遷占者国家における遷占者集団のリーダーに本省人の青年政治家が中華民国の正統化機構の中で土着集団の存在の「尊重と承認」を要求する族群政治の場面として代表的場面だったからである。ただ、この時の康寧祥の質問の文言は、台湾人民の抗日史もまた「中華民国歴史文化の貴重な財産」である、といったオフィシャルな中国ナショナリズムのレトリックをちりばめたものであった（若林 2008、151頁）。しかし、公職選挙という「民主の休日」の街頭でほとんどの聴衆の母語によって語る場合には、オフィシャルなレトリックを超えないとしてもその族群言説の訴えはより直接的なものとなり、聴衆への衝撃力はより強いものであったと想定することができる。前記のように情報治安機関が「挑発的」と蔣経国に報告した所以であろう。

参考文献

日本語

- 周婉窈 [濱島敦俊監訳] (2013) 『図説 台湾の歴史 増補版』平凡社。
 若林正文 (1992) 『台湾—分裂国家と民主化—』東京大学出版会。
 _____ (2008) 『台湾の政治—中華民国台湾化の戦後史—』東京大学出版会。

中国語（漢字五十音順）

- 章政通 (1989) 「三十多年来知識分子追求自由民主的歷程—從『自由中国』、『文星』、『大学雜誌』到党外的民主運動—」、中国論壇編輯委員會主編『台湾地区社会變遷與文化發展』台北、聯誼出版社、341-380頁。
 王景弘編訳 (2013) 『列入記録 危疑年代 (1970-1973) 的台湾外交私密談話』台北、玉山社。
 郭紀舟 (1995) 「一九七〇年代台湾左翼啓蒙運動—『夏潮』雜誌研究—」、東海大学歴史学研究所碩士論文。
 許瑞浩 (2002) 「《臺灣政論》の初步分析—以『自由化』、『民主化』和『本土化』為中心—」『國史館學術集刊』第2期、245-296頁。
 康寧祥口述、陳翠蓮訪談 (2010) 『康寧祥先生訪談錄』霧峰、立法院議政博物館。
 康寧祥論述、陳政農編撰 (2013) 『台湾、打拚 康寧祥回憶錄』台北、允晨文化。
 高麗娟 (2008) 『從覺民到覺醒—開花的猶大—』台北、玉山社。
 蔡盛琦 (2008) 「《深耕雜誌》之研究 (1981.6-1983.2)」『國史館學術集刊』第15期、159-208頁。
 謝欣純 (2002) 『郭国基與戰後台湾地方自治』国立台湾師範大学歴史研究所碩士論文。
 蕭阿勤 (2012) 『重構台湾 当代民族主義的文化政治』台北、聯經出版。
 薛化元 (1996) 『《自由中国》與民主憲政—1950年代台湾思想史的一個考察—』台北、稻鄉出版社。
 蘇瑞鏘 (2005) 『戰後台湾組党運動的濫觴—「中国民主党」組党運動—』台北、稻鄉出版社。
 _____ (2008) 『超越党籍、省籍與國籍—傅正與戰後台湾民主運動—』台北、前衛出版社。
 蘇碩斌 (2010) 『看不見與看得見的臺北 (修訂一版)』台北、群学出版。
 孫寅瑞 (2001) 「『党外』一詞意義之史考察」『史匯』第5期、101-110頁。
 中央選挙管理委員會 (1984a) 『中華民国選挙概況 (上篇)』台北、中央選挙管理委員會。
 _____ (1984b) 『中華民国選挙概況 (下篇)』台北、中央選挙管理委員會。
 陳煒翰 (2009) 「從《自由時代》系列雜誌看 1986 年的党外運動」『台湾史学雜誌』[台湾歴史学会] 第6期、151-172頁。
 陳信傑 (2000) 「民主進步党的創党過程—外省菁英分子所扮演的角色—」中国文化大学政治学研究所碩士論文

-
- 陳明通（1995）『派系政治與台湾政治變遷』台北、月旦出版社。
- 鄭鴻生（2001）『青春之歌——追憶 1970 年代台湾左翼青年的一段如火年華——』台北、聯經出版。
- 南方朔（1979）『中国自由主義的最後堡壘』台北、四季出版。
- 彭琳淞（2004）「党外雜誌與台湾民主運動」『二十世紀台湾民主發展——第七屆中華民國史專題論文集——』台北、国史館、693-782 頁。
- 姚嘉文（1999）「從追求法律正義走向美麗島 一」、新台湾研究文教基金会美麗島事件口述歷史編輯小組編『走向美麗島 戰後反对意識的萌芽』台北、時報文化出版、225-233 頁。
- 李筱峰（1987）『台湾民主運動 40 年』台北、自立晚報社。
- （1999）「從校園走向美麗島 一」、新台湾研究文教基金会美麗島事件口述歷史編輯小組編『走向美麗島 戰後反对意識的萌芽』台北、時報文化出版、173-176 頁。
- 廖達琪・秦鳳英（1992）「知識菁英團體對威權體制民主化的影響——臺灣『大學雜誌社』個案分析——」『中山社會科學季刊』第 7 卷第 4 期、43-57 頁。

英語

- Taylor, Jay (2000), *The Generalissimo's Son: Chiang Ching-kuo and the Revolutions in China and Taiwan*, Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press.

科研費プロジェクトによるインタビュー記録（録音）

- 康寧祥氏(1)：2012 年 11 月 3 日、於台北市国賓大飯店。
- 康寧祥氏(2)：2013 年 3 月 4 日、於台北市亞太民主發展基金会。
- 李筱峰氏：2012 年 11 月 3 日、於台北市台北教育大学。
- 吳密察氏：2013 年 3 月 16 日、於台北市温州街「婆婆館子」。

(2014 年 7 月 26 日投稿受理、2015 年 2 月 25 日採用決定)